

---

# **最強って何？**

若月 椎名

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強って何？

### 【Zマーク】

2029

### 【作者名】

若月 椎名

### 【あらすじ】

妹と二人で平和に暮らしていた俺。しかしある日、家に強盗が押しかけてきて妹は死んだ。そして俺は気づけば神の前に立っていた。神は妹を生き返らせてくれるといった。そして妹を生き返らせるために少年は神が出した条件を飲むことにした・・・・あっちなみに作者は極度の口リコンです。それでもいいかたはぜひお立ち寄りください。

## ～神との戦い～（前書き）

なにもおもじつかない・・・・・・オーラ  
みなさん知つてのとおりこの小説の作者は馬鹿です。（こいつたこいつ  
ちやないかー

作者はそれを自負した上で書いております。なので本文中に変なと  
ころがあつたら、『うわーこんなとこハミスつてるよ。作者プロギャ  
ー』などと罵つて貰つてかまいません。感想待つてます。^ ^

## ～神との出会い～

えっと……………」何処？

俺は目が覚めたら知らない場所に居た。

普通の人間なら朝起きて違う場所に居たら驚くだろうが、俺こと御みじ智也に至ってはその限りではない。

実は昨日の夜、俺は自殺するために大量の睡眠薬を飲んだ。

そして目が覚めたら、ここに居た。

見渡す限り平原の中で俺は先程から胸に引っかかっていた疑問を口にする。

「俺は…………死んだのか？」

丁度その時だつた。いきなり智也の体が発光した。

「なっ！！！何が起きてるんだー？」

そして次の瞬間。

先程居た平原とはまた別のところに智也は立っていた。

そこはまるでドラゴンホールに出てくる神の神殿的なものがあった。

「…………死んだ……何処だ？」

再び同じ疑問が浮かんでくる。

一体何が起こっている。

俺は冷静に考える。そして整理してみた。

昨日、学校が終わりそのまま家に帰宅した俺。

そして家の玄関を開けた時、俺と二人暮らしだった妹が黒いマスクで顔を覆っている強盗らしき人物に包丁で刺され死んでいた。そう

は、怒りのあまり玄関にあつた花瓶を手にとつて強盗にたたきつけたんだ。そして妹を殺した強盗を俺が殺した・・・・・・・

1

そしてその夜、俺は・・・妹を失つた虚しさから逃れるために死んだんだ。

そう・・・確かに死んだはずだ。  
死んでないほうがおかしい。  
あれだけの睡眠薬を飲んだんだ。

そして俺は現在、この神殿的なところにいる。

俺は無力だ・・・・妹も守れなかつた。不意に涙が頬を伝つ。

「お~い少年。何をしておる。せやへやへやか。」

• • • • • • • • • 誰？

とりあえず呼ばれたほうに行つてみた。

そこには白髪の爺さんがいた。頭の上に変な輪が浮いている。

もしや  
と思つたが一応聞いてみる。

「あの・・・どちら様でしょつか?」

「ワシか?わしゃ神じやよ。」

やつぱりか〜〜〜〜。俺の突つ込みは天高くまで響いた。

「それでここは何処ですか?もしかして天国だつたりするんですか?」

「いやここは天国ではない。そもそも君達人間の考へてゐる天国や地獄といった物は存在しないのじやよ。死んだ者の魂は一度神の元に集められる。そしてその後、過去の記憶や、性格をリセットして新たな肉体の誕生と共に送り出すのじやよ。」

なんか物凄い」と言つてる気がする。

しかし俺はここで一つの疑問を浮かべる。

この神殿には神様とやらのほかには俺しかいない。

普通ならもつと大勢いてもおかしくないはずだ。

それに・・・死んだ人が神の元に集まるつて事は俺の妹もいるはずだ。

俺は口を開く。

「何で俺しかいないんですか?」

神はものすごい笑顔で良くぞ聞いてくれたつて感じで話しだす。

「実はの～久々に人間界を覗いていたら悪の気配がしての、観てみるとお主の妹が死んでいて。お主が妹を殺した犯人を殺した所を見かけての、お主がその後どうするか興味が湧いた所で、いきなり自殺しよるから、驚いたぞい」

神はあるの事件のことを語りだした。しかしあの事件と俺がここにいることの関係性が見当たらない俺はもつと直接的に聞いてみた。

「え～～と、それで俺に一体なんの用ですか？」

「お主の妹を生き返らせてやる」

「えつ・・・・」

神とやらが言つた言葉に俺は正直、何言つてゐんだろ?」こつと思つた。

しかしこの自称神な人が言つてる言葉は雰囲氣でなんとなく本氣まじだと俺は感じ取つた。

「その話本当ですか?」

神に飛びかかる俺。

神は本当じやと言ひながら、そのかわりに条件があると言つて來た。

「条件つて何ですか?」

ものすゞくいやな予感がした。神は先ほど見せた笑顔よりも更に笑顔で妹を蘇らせる変わりの条件とやらを話し出した。

「実はの～う見えてもワシはもう8千万年もこの神殿に住んでいての、退屈で退屈で退屈で退屈での～いつ觀ても世界は特に楽しいこともなく時が過ぎてゆくんじゃ」

何処か遠くを見つめながら話す神は、とても寂しそうだった。神の綺麗な黄金の瞳はぼんやりとしている。きっと昔、そう神が生まれた頃くらいはまだまだ色あせない輝きを放っていたであろう瞳を見て俺は、なにか止めようのない憤りを感じた。

そして神は一呼吸置くとまた語りだした。

「そんな長い年月を生きたわしだからこそ気づいたことは多々ある。人はみな強欲なものじゃ。必ず心のどこかに悪が潜んでる。そして何時の世も戦争や貧困であえぐ人々の姿は存在する。わしもわりに全世界を見渡して、できる限りのことをしてきた。しかしやはり、わしのようなひとならざる者が人間達などに手を貸してしまつたら世界の均衡は崩れいづれ全世界がほろびるじゃろう。そこでわしは考えた。悪の心を持たぬ人間が現れたときその者に世界を導かせようとな」

「もしかして……悪の心を持たない人間って……俺のことですか？」

「そうじゃお主は生まれたときから選ばれてたんじゃよ。お主は人間であり神の子であるのじゃ」

そう言った神は俺に向かつてどうする?といつ視線を投げかけてくる。

もちろん妹が助かるなら俺は何だつてするさ。だけど……俺は迷つた。

それはもちろん妹が生き返ることを前提にしての迷いだった。そして神に俺は告げる。

「わかりました。神の意思に従います。その代わり一つだけ願いを聞いてもらえませんか？」

「いいじゃらう」

神は快く了承してくれた。

俺は俺の思いを告げる

「妹の・・・・妹の俺に関する記憶を全て消してください。お願ひします。」

神は智也が言つた願いがあまりにも想像していたものと違ひ面を食らつた様子。

「本当にいいのか？」

そう問い合わせてくる神に智也は青く透き通つた何の迷いもない瞳で「はい」と答えた。

神は

「最近の人間の考えることはわからんなー」

とため息混じりに囁いて手に持つっていた杖の先を地面上にコシコシコツと3回ほど当てた。

すると神の懷から光の玉が飛び出してきて、はるかかなたに飛んでいった。

「よし。これで妹さんは生き返つたぞい」

そう話す神を横目に光の玉が飛んでいったほうを見つめる智也はどこか寂しげだった・・・



## ～神との出合～（後書き）

なんかおもいついたんで書いてみました。もしよろしかつたら感想など待っています。

こんな駄作笑つてもらつて結構なんで、駄目なところなどの指摘お願いします。

「えつ……それでチートすぎない?」

「わいと……お主の妹も生き返らせたしの、そろそろお主にして貰うこと話をやうと思つたるんじやが……わしの話を聞かんかし……」

後頭部に激痛が走る。どうやら神にツツツツを入れられたみたいだ。

「イタタタタ。なにするんですか?……」

神に抗議する。

神はそんな俺を見て一笑すると、先程とは違つ真剣な眼差しで語りだした。

「お主には、ある世界を救つて貰いたい。」

「はい?」

キヨトーンとしてこむ智也に神は、さらに細かい話をしだした。

「先程も話した通り、お主には悪の心が見受けられないのだ。そもそもなぜお主がここにいるかと言つとわしさこの宮殿にある仕掛けを施していたのじや。それは『誰かのために強くなれる心』『誰にでも平等に接することができる心』『己の命を覚悟のために捨てられる心』を持った人間が死んだ時、自動的にこの宮殿に送られると言つものじや。そして今までにここにいらっしゃつしてお主が居ると言つ事は、お主は確かにこれらの人質を持つてこむことになる。だ

から、お主にはわしの代わりとなつて世界を導いてほしいんじや。わかつたか？」

なるほど……しかし俺には本当に悪の心が無いのだろうか。俺は強盗といえど一人の人間を殺めている……それは悪……して言えば罪ではないのだろうか？

俯いている俺に神は何かを察したのだろうか、先程の話にこう付け加えた。

「お主は確かに一人の罪人を殺めた。しかしお主は自分の私利私欲のために殺めたのか。それは否。お主は殺された妹の仇討ちとして殺めたのじや。殺人が罪では無いという訳ではない。しかしお主が殺めたのは妹のためにした事なんじやよ。すこし度が過ぎた見たいじやが、お主はそんな自分を許せずに自殺しようとしたことも事実。それは誰かと思う気持ちが無ければできないことなんじやよ。そんなお主だからこそ、わしの仕掛けが反応したんじやよ。」

神はほんやりとした黄金の瞳で俺を見つめ、最初にあつた時と同じ笑顔を浮かべた。

俺は神が発した言葉を聞いて、胸の中に溜まっていた重みが軽くなつた事に気づいた。

そして俺は具体的に何をすればいいかを聞いた。

神は話が遅くなつたと言つて、「とりあえず、お主に力を与える。どんな力がほしい？ 好きな願いを言つてみろ。10個までならいいだ。」と言いました。

普通、願いを叶えるとか言つたら一つとか三つまでとかの設定があ

ると思うんだが・・・今、田の前にいる神様は10個までいいとかほざいちゃってるんですけど。いくらなんでもそれはチートすぎるだろ。と心の中で突っ込むが、まあ10個も叶えてくれるつててるんだから、一応いろいろ言つてみる。

「それじゃあ・・・時間を操る力と小指で10t位の岩を持ち上げるほどの怪力と空気を操作する力と心で思つたものを作り出せる力どんな攻撃や毒をくらつても効かない体と・・・」

いろいろな願いを早口で喋りだす俺に神がちょっと待つたといい。今から俺が行く世界には超能力や魔法と言つた代物がある事を教えてくれた。そしてもうちょっとゆっくり考えてもう一度整理してから願い事を決めると言つてきた。

そして俺は、結局いろいろと考えて以下の10個の願いを神に頼んだ。

願いその1・時間を操る力

願いその2・怪力（小指一つで10tの岩石を持てるレベル）

願いその3・全ての魔法の理解。

願いその4・全ての魔法を使えるようになること。

願いその5・全ての超能力の理解。

願いその6・全ての超能力を使えるようになること。

願いその7・どんな攻撃や毒もくらわない最強の肉体。

願いその8・今から行く世界の文字を理解する力。

願いその9・鍊金術の理解。

願いその10・鍊金術を使えるようにすること。

神はOKと軽くいって、杖を俺に向けた。

そして杖から光の塊が俺に向かつて飛び出した。

光の塊が俺に触れた途端、俺の全身を光が覆つた。

～えつ……それってチートすぎない?～（後書き）

感想待つてます。^ ^

願いが10個までつてチートすぎないと思つてる方もいらっしゃると思いますので次の章に詳しい説明を書こうと思つています。（まあ下手をしたらそのままストーリー進めるかもせんが^ ^；

ほんとに読んでくださってる方々には感謝します。これからも温かい目で見守つてくださいると嬉しいです^ ^。

## ～主人公のお名前は～（前書き）

いつもいつもこんなダメ作者の駄文を読んでくだけって本当に感謝しています。

自分でも判つてこる気がします。この小説・・・・展開遅つ。とツッコムト居る方もいるだろつと思ひます。本当にスイマセン。いまの睡眠不足状態では、これが限界なんです。お願いですから見捨てないでください^ ^ :

・・・・・ それでは本文をビ'ツギ。

～主人公のお名前は？～

神の杖から飛び出してきた光が俺の体を包んだ。

そして数秒すると、光はだんだんと体の中に吸い込まれていった。

「よし。これでお主の願い通りのはずじゃ。それじゃあ力も『えた』ことだし早速行つてもいいつかの～」

神はそう言つて、俺の胸に杖を突きつけた。

「えっ！？」

今の俺は自分がこれから行く世界が超能力や魔術がある世界としか聞かされていない。それに自分がその世界でどんなことをすればいいのかも聞かされていない。当然のように俺は抗議する。

遅かったさ。うん。神様酷すぎるでしょ。俺が「ちょっと待ってく  
ださい」といった瞬間に俺を異世界

に飛ばしやがった。

しかし……どうしようか。よくよく考えてみれば今の俺には肉体が

無い。一応、前の世界で死んでるか

ら肉体はすでに火葬されてしまふことだらけ……ナントコッタ。

ホントニードウシコウ、コノママジ

ヤオレ、フコウレイミタイジャナイカ。

そんな事を考へてみると、頭の中ではいつのまにかじりついてしまったがお主には肝心の体が無い。じゃから転生と言つ形でお主の魂を新たな肉体に固定せねばならん。まあ、わかりやすく言つとお主は今までの記憶をそのままに生まれたての子供になるってことじやな

『ほつほつほ。わついえぱいーーあれどつたがお主には肝心の体が無い。じゃから転生と言つ形でお主の魂を新たな肉体に固定せねばならん。まあ、わかりやすく言つとお主は今までの記憶をそのままに生まれたての子供になるってことじやな

「ほんとにナントコッタ。マジですか? マジなのか。俺が赤ん坊になるとだと…………まあいつか~」

赤ん坊からやり直すのも楽しそうだし。

「それで神様、さつきは聞けませんでしたけど俺はこの世界で一体どんなことをすればいいんですか?」

『それはじやな…………血由じや。お主の好むなよつこ や。』

「へっ！？俺の好きなようつい？」

『やうじや。お主に与えた10の力、それを生かすも殺すもお主しだこじや。わしは何も手出しませんから、お主はお主自身のためにすべきことを見つけ、それをやり遂げる。それが悪なのか善なのか決めるのは全てお主じや。それじゃあわしも在るべきところに帰る。まあせいぜい頑張ることじやな』

やつこい残して神の声は聞こえなくなつた。

そして・・・・俺は新たな世界に生を受けた。

俺が生まれて5年後・・・・

俺が生まれた国はセルドラント帝国と並んで、この世界の中で一、

ーを争つほどの大国である。

俺が生まれた家はいわゆる貴族といった、お金持ちの家だった。

と言つてもそれほどまでの名門貴族と言つわけでも無い。

この世界での俺の名前は、シリウス・マリスミティと言つ。

ちなみにシリウスが名前でマリスミティが苗字だ。

俺はできるだけ自分の力がばれないように、病弱ぶつていつも部屋にこもっていた。

なんてつたつて小指で10ヶ指が持てるのだ。下手をしたらハンドピンだけで人を殺めてしまう。

誰もいない部屋で俺は毎日、神から貰い受けた力を制御・理解して  
いった・・・・・

～主人公のお名前は？～（後書き）

やつてしまつた・・・・・OTL

作者「ま、いつか」

# シリウス「何でやねんっ」

作者「ぐはっ。やつやめるんだ。  
シリウス君の怪力でつっこまれた  
ら死んでしまひ。」

シリウス「うるせえ。俺の妹に会わせろ。」

作者「シリウス君・・・・君はやはり・・・・シスノ〇だつたのか――！」

シリウス「ちつが～～～う！～！俺はただアイツのことが心配なだけだ。」

作者「うんうん。わかつてると、君の言いたいことは。でも近〇相〇はいけないぞ~」

作者「うつうわあああああああー！ふつふつふ。」

シリウス「なつ！？なにつ！！！」

作者「甘い甘過ぎるぞ。まるで名前を書いて冷蔵庫に入っていたプリンを兄貴に横取りされたときぐらいいの甘さだな。」

シリウス「それ、何の話?」

作者「うるさい黙れ。能力を極度のシス＆ロリコンにあるぞつ^\_^  
ニコニコ」

シリウス「……………^\_~」

シリウス「スマセンでしたつ　〇ト」

でもやっぱり創造主の作者には叶わないシリウスであつた。

さて次回、いよいよチート主人公の能力説明です。

能力説明だけで終わりにするかそのまま話を続けるか悩んでいます。

どなたか、この小説の感想くれませんか^\_~

正直言つて自分で書いてて楽しいのですが、知らない人が読んだら  
どんな事を思うのか知つてみたいので是非とも感想お待ちしてお  
ります。^\_~ :

## ～主人公設定説明章～（前書き）

やつとこの時が来ました。

主人公の能力などの説明が、やつとできます。

注意・この回では、物語は進まないのでご了承ください。

## （主人公設定説明章）

主人公名 シリウス・マリストミティ

性別 男

年齢 肉体は5歳。精神年齢は17歳。

髪の色 漆黒（こちらの世界ではその者の能力によって髪や瞳の色が変化するらしい）

瞳の色 漆黒（左目）／金（右目）（右目は金色で時を止めるための媒体になつており眼帯をしている。眼帯にはその他にも意味がある）

顔立ち まあ普通にイケメン。（イケメンなんて死ねばいいのに・

・・b）作者）

装備品 力と魔力を抑えるためと目を隠すための眼帯。さらに呪水が染み込まれていて包帯を両腕に巻きつけている。理由は力を抑えるためだ。その他にも、包帯を巻いた腕の上から封鎖（封印を施してある鎖）を巻きつけてる。

所持スキル

超能力・魔術・鍊金術・最強の肉体・怪力・言語理解・時間操作など

所持スキルについての詳細説明

## 『時間操作』について

時間操作は超能力や魔術と違い、魔力消費及び肉体的疲労が一切ない。

しかしながら欠点はある。まず時間を戻すことはできない。そのほか時間を進めることもできない。

つまりは時間を止めるかゆっくりにすることしかできない。一回の使用で時間を止められる時間は2時間が限度。

## 『怪力』について

怪力は体质として引き継がれているため制御することは可能。しかしまだまだ成長段階のシリウスにとっては力の制御が効かない時がある。後、5年もすれば安定する事だろう。ちなみにシリウスは自身の力を抑えるために右目に封印の術式を用いた漆黒の眼帯を付けている。その他に力を抑制するための呪水を染み付けた包帯を両腕に巻いている。

## 『全ての魔法（魔術）の理解』について

全ての魔法の理解は、一度でも魔法を見たならその魔法の性質や能力及び術式などの情報を完全に理解することができる力だ。ちなみに文献などの書物でも一度見れば理解することができる。（ただし、魔法名を読み取らなくてはいけない）。その他、前にいた世界のアニメ（とある魔術の○書目録）で存在していた竜王の殺息<sup>ドラゴンフレイズ</sup>は理解できたので前の世界のアニメの魔術なども使えることが判った。

## 『全ての魔法（魔術）の使用』について

全ての魔法の使用は、先述で述べた『全ての魔法の理解』により得た魔法知識を自分の魔法として使いこなせるようになる力。

#### 『全ての超能力の理解』について

全ての超能力の理解は一度見たりもしくは名前さえわかればその力がどんなものなのかを理解することが出来る。ちなみにこれも前の世界のアニメの中には存在していた能力を理解することが可能。

#### 『全ての超能力の使用』について

全ての超能力の使用は先述の『全ての超能力の理解』により理解した超能力を使用する事ができるようになる力。

#### 『どんな攻撃や毒もくらわない最強の肉体』について

この力に関してはいさか問題があつた。俺は確かに神にどんな攻撃や毒もくらわない最強の肉体をください。って言つたが、別に魔力を強くしてくれとは言つてなかつた。神様の馬鹿野郎はなにを血迷つたのか俺の魔力まで最強にしやがつた。ちなみに俺の魔力がどれくらいすごいかと言うと、普通の人は魔力数値が100～1000で魔術師は魔力数値が100000から150000位で歴代で【神の使い】と呼ばれて居た最強の魔術師が100000位だつたらしい。そして俺の魔力は100000000だ。ほんとに神様冗談が過ぎますよ。まあ別にいいんだよ。うん。その膨大な魔力を押さえ込むのだけで2年半かかったとか、気にしてないよ。うん。その力を完全に制御するのに後5年は一步も外に出れないとか気にしてないよ。うん。

もう俺二ート宣言だよ。生まれた瞬間から二ートだよ。貴族なのに二ートだよ。どつかの牛丼大好きなキン〇クマン的な立ち位置だよ・

・・・ O T L ・・・ なんか疲れた。さあ次の説明に行きましょう。

^ ^

### 『文字を理解する力』について

この力はこの世界に存在するあらゆる文字を読むことができる力。判りやすく言つと、古代の魔法の文献などを読むため力である。

### 『鍊金術の理解』について

この世界には存在しないようなので、一応この世界では主人公のみの力。まあ良くわからない方は鋼の鍊〇術師を思い浮かべてください。あんな感じです。

### 『鍊金術の使用』について

こちらも鋼の鍊金術<sup>s</sup>（ryo）を参考にしてください。一応形あるものなら何でも練成は可能。しかもサイズに制限は無く使い放題。まさにチート。

## ～主人公設定説明章～（後書き）

まず最初にこの小説を読んでくださった方に感謝申し上げます。  
ありがとうございます。

実は感想を下さった方の中に、『文字の理解』は文字だけの理解で  
言語が伝わらないのではないか?と質問をしてくださった方がいま  
したので、この場を借りて謝らせていただきます。本当にすいませんでした。

確かに『文字の理解』といふ言葉では皆もんぞの思ひ事でしょう。  
本当にすいません^ ^ :

これにはちょっとした設定があったので、今回の章で説明しました  
が、この『文字の理解』は様々な文字を理解することができるんで  
すよ。

そして言語の理解についてですが、主人公は生まれたての赤ちゃん  
と同じでしたから、われわれのように気づいたら言語を理解してい  
たって言つ設定なんですよ。はい^ ^ :なんかスマセント!!!  
また何か気になることがありましたら言つて下さい。出来る限り対  
処しようと思います。でもでも、率直な感想を下さったなら作者は大  
喜びします。^ ^

それではまた次の章でお会いしましょ^ ^

# ～実は少女はお姫様?～（前書き）

・・・・・  
ゞゞゞ  
^ ^ ^  
/

～実は少女はお姫様?～

「さてと、今日の訓練はこれくらいにして夜飯でも食べようかな」

「俺」とシリウスはいつもいつもいつも部屋に引きこもつていて。

5歳なのにここまで話せるのは「愛嬌つてことだへへ・ちなみに人前で喋るときは一人称が僕になる。

食事は、この部屋で食べる。ちなみに食事はメイドの人を作つて部屋の扉の前に置いててくれる。

お風呂やトイレなども部屋に完備していて、日常生活に必要なものは全てそろつてている。

しかし良く考えてみたらこんなに幼い子供が部屋に引きこもつていたらおかしいと踏思うだろう。しかも一人で。

しかし誰も俺を部屋から出さうとはしない。何でだと思つ?

それは俺の存在があおやけにされていないからだ。

この屋敷の中で俺の存在を認知しているのは父親と数人のメイド。そして屋敷以外で唯一俺の存在を知っているのが

ガチャ。

「シリウスー」

いきなり部屋のドアをぶち破って進入してきたこの女の子だ。

なんのためらいも無く俺が横たわってるベットにダイビングしてきた。  
うほつ

正直きつい。いま完全に鳩尾に入っていましたよ。うん。

この縁の瞳とまるで空のような水色の髪を持った少女の名はシャルル・セルダント。

なにを隠そうこの少女はセルダント帝国の次期皇女候補である。判りやすく言ひとお姫様だ。

年は8歳で俺よりも3歳年上だ。

ん？なんで姫様が俺みたいな下級貴族の、しかも存在がおおやけになつていらない奴の事を知つているかだつて？それを説明するには今から1年前、俺が4歳のときに遡る。

一年前・・・・

俺は生まれたときから病弱を装っていたのでその頃から存在していることは公にされていない。それは父親が病弱な息子に家を継がせては家の名に傷が付くとかほざいたせいで、俺は引きこもっている

と黙つよつは軟禁されてゐるに近い。なんて親だよまつたぐ。

ちなみに俺がいる部屋は本宅から10㍍ほど離れた別館の中の2階の一一番奥にある。

まあ俺としては好都合なんだけどね、基本的にメイドさん以外来ないから多少力が漏れ出してもばれないしね。

そして俺が軟禁されて早4年が経とつとした時、俺の部屋に一人の少女が入ってきた。

もちろんその時の俺は右目に眼帯、両腕に包帯、その上から鎖を巻いていて、正直言つてただの変質者にしか思えない出で立ちであつたろう。

そして少女はベットで横たわる俺を見て「ひづ」と言つた。

「たつ、助けて！……」

あれー？普通、俺のこの姿を見たら化け物とか化け物とか化け物とか言つちゃう筈なのに、第一声が「助けて！……」だったよ？？？

助けを求める少女の後ろには鎧を着た兵士？らしき人達がいた。

あれ良く見るとこの女の子……メツチャカワヒヒヤン。

うん 僕助けちゃう。美少女は世界の宝だからね。うん

ベットから体を起こして俺は少女と兵士達の間に立ち塞がつた。

兵士の数は全部で5人。判りやすいように兵士A、B、C、D、Eとします。

少女の前に立つた俺を見て兵士じが口を開く。

「なんだこのガキ、  
氣味がワリイ。」

続いて兵士Aが

「なんでこんな所にガキがいるんだ?」

すると兵士Bが

「こんなガキどうでもいいから早くしねえとお姫様の護衛の奴らが駆けつけてくるぞーーー！」

それを合図のように兵士A、C、D、Eが頷く。

そして兵士達は少女に向かつて一斉に飛び掛ってきた。

俺は眼帯を外し右目を開く、そして心中で『時よ止まれ』と囁く。すると飛び掛ってきた兵士達は皆空中で止まっている。もちろん俺の後ろで震えていた少女も固まっている。俺は動かない兵士達の脇腹に力を抑えたパンチをお見舞いする。（ちなみに力を抑えた状態でも軽く500kgの岩を持てたりする）

俺はそのまま兵士達の真後ろにある窓を開く。

そして眼帯を付けながら心の中でもた囁く『時よ動け』。

すると空中で止まっていた兵士達は後方へ吹き飛び。窓の外に落ちた。うん、全員気絶してる。

そして後ろに振り返り、一体なにが起きたのか判らない顔をする少女に手を差し伸べる。

「もう大丈夫だよ。」

恐怖を『えな』ように満点のスマイルで。

なんとか知らないけど少女は俺の顔を見て頬が真っ赤になった。どうしたんだろう?俺の顔ってそんなに変かなーと思いつながらも、少女は俺の手を取り立ち上がった。

「あつ、ありがとう」

うーんなんでだろう少女は俺と田を合わせたくないのだろうか、そっぽを向いている。

やっぱ俺って、化け物みたいなのかな。はあ~

「わつ、わたしのなまえはシャルル。シャルル・セルドラント。あなたのなまえは?」

「僕の名前はシリウス・マリスミティヤ。」

名前を言つ終えるとふと思つた。あれセルドラントってこの国の名前だよな。

「まさか・・・お姫様？」

「クッ。つと少女は頷いた。そして俺に向かつて「なんでこんな所にいるの?」と聞いてきた。

いや普通に考えたら逆になんでお姫様がこんな下級貴族の家にいるの?と聞き返すだろうが、俺はあえてそうは聞かず、

「僕は生まれつき体が弱いんだ。だから誰にも迷惑がかからないよう、ここに住んでるの」

と答えた。

その後、僕の部屋にお姫様の護衛の人達が入ってきて、俺は隠れた。

後で知つたんだが姫を狙っていた兵士達は、反帝国を名乗る組織からの刺客だったらしい。

ちなみに姫が下級貴族・・・つまり俺の家に来ていた理由は定期的に貴族の家で行われる、舞踏会を見に来ていたかららしい。まあ定期舞踏会は毎回違う貴族の家で行われるから、この日はたまたま俺の家で行われていたって事だ。それがあまりにも退屈で、本館から抜け出した所を例の刺客に襲われて、別館の俺の部屋まで逃げてきたって事らしい。それと俺が刺客を倒したことは誰も知らない。唯一その事を知っているのは、少女 姫だけである。

まあなんだかんだで、その反帝国組織も刺客の証言により摘発されて一件落着したんだが・・・

それから一年たつた今。

「なんでここに来るんですか！？」

そう・・・・・・あの事件からお姫様は、定期的に俺の家、しかも俺の部屋に勝手にやつてくるようになった。

「だつてシリウス様の事が好きなんだもんっ」

はあ～～ぢうじょわ。こつこつもこのお転婆お姫様はこいつ言つて部屋に来る。

俺はシャルルの事が好きだ、でもシャルルは友達として俺のことが好きなんだろ？。

それでもこんな化け物みたいな格好をしてる俺を友達としてでも好きになつてくれるって事は、シャルルはとてもいい子なんだな」と思つ。

そしてシャルルは毎回のよひこいの医者が居るから診でもらつて、と言つてくる。俺の体の事を気にしてくれるのはありがたいことなんだが、病弱を演技としてやつている俺からしたらとてつもない罪悪感が湧き上がつてくる。

まあ俺も美少女の純粋な瞳で見つめられたら、ノックアウトしそうだがせいぜいあと5年はなんとしてもこの病弱設定を続けないといけないので、

「いつもいつもありがとうねシャルル。こんな僕のために。でも僕の病気はきっと治らない。そんな気がするんだ。」

いつもの台詞を呟く。正直言って恥ずかしい。こんな台詞よく言えるな俺。いやホントに。

そしてこの台詞を言った後は、必ず姫様が泣き出す。

「う・う・う・ひぐ・ひぐ・ひぐ・

美少女の泣く姿を見るのは辛い、でも仕方が無いんだ。いつも言わないで俺の力がばれて大変なことになる。もう少しの辛抱なんだ。あと少しで力を制御出来るようになるから。後少しだけ待っていてくれ。

他愛の無いやり取りなどをしながら月日は着実に流れていった・・・

～実は少女はお姫様?～（後書き）

なんて・・・なんて強引な終わり方だよコノヤロウ。

作者は今、錯乱状態に入っています。

次回はこつきに月日が流れでシリウスが15歳になつた所から始まります。

え? なんでそんなに月日が経つたつて? そりやあ、あれだよあれ。

もひとつ戦闘描写とか学園生活とか書きたいからだよコノヤロー

ホントにわがままな作者で「めんなさい」下座で謝らせて頂きます。  
・ O T L

でもでも次くらいからが最高に面白くなつて来ると思こますので」「  
期待ください。

どなたか・・・評価を・・・評価と言ひづの・・・元氣をオラに  
分けてくれー。

・ · · · · · · · · · · O T L。

それでは次回またお会いしましょ^ ^



～お姫様はヤンキーなのだつーーー～（前書き）

・・・・・〇一」

作者は本当に駄目な奴です。

もう笑ひにやつてください。

～お姫様はヤンケレなのだつ！～

俺は今15歳になつてゐる。

振り返つてみればこの15年間色々なことがあつた。

姫と出会つたり、現存する魔術書や古の魔法についての文献などを読みつくしたりしたり。

さらには父親が死に結局は俺が家を継ぐことになつたり。ちなみに俺が13歳の時だ。

力の制御は完璧に出来るようになつたんだが病弱設定をいまだに続けている。だつてそつだろ、良く考えれば生まれつき病弱つて人がいきなり治つたーーーとか言つてきたらおかしいだろう・・・。それと腕の鎖と包帯はもつつかれてない。まあ眼帯はつけっぱだが・・・

そして俺は今田もいつもの部屋で寝ていたのだが・・・・

「シリウス様――――」

「姫さま・・・また来たんですか・・・

「姫さま・・・また来たんですか・・・

またこのお姫様は・・・

「私のことはシャルルと呼べといつてあるだろ？」「

姫の薄い緑の瞳が僕を見据える。

「わかりましたよ。シャルル様。それで僕に何の御用ですか？」

なんでお姫様がこんな下級貴族の家に入り浸るのだろうか？

「用事も何も私はシリウス様のことが・・・好きだから・・・」  
そうこれが原因だ。

はあ～俺つていつの間に姫様とのフラグ立てたんだろう。しかもシリウス様とか呼ばれてるし俺。

「だからシリウス様、私と結婚してください。」

どんだけ姫様強引なんですか。

「姫様。軽はずみな発言はお控えください。」

すると部屋の扉のほうに居た姫の護衛らしき人が姫を注意する。良く見たらイケメンじゃん。

「私は・・・私は本当にシリウス様の事を愛しているのです。だから結婚するんです。」

するとイケメンな護衛の人が

「姫とこんなゴミクズ下級貴族とでは絶対に結婚など出来ません。」

いい加減、上級貴族である私と婚約して貰えませんかね。」

ウザッ。なにこいつメッチャウザッ。

シャルルの事を権力の道具としか見ていない所とか万死に値する。

「おい 「今、なんとおっしゃいました。」・・・つえ?」

俺がイケメン貴族野郎に言い返そ�としたとき、シャルルが冷めた声で話し出した。

「シリウス様の事を・・・侮辱しましたね・・・」

「え、一体どうしたの? シャルルさん。目がうつるだよー。ひょいと怖いよー

イケメン貴族もシャルルの周りの空気が変わったことに気づいたのか、一瞬たじろいた。

しかしさすがは上級貴族と言つた所か、口ひいては駄目だと思つたのかシャルルに言い返した。

「所詮、下級貴族などましてやそこには居る『ミ』の様な奴は上級貴族の食べ残しを啜る虫けらのような存在でしかないんですよ」

それを聞いたシャルルは何かのリミッターが外れたのか杖を取り出して呪文を唱え始めた。

「流れ出る青き水よ その力を形に変えて 我に仇なす者を退けよ

シャルルが呪文を唱え終わると、何処からともなく大量の水が現れイケメン貴族を飲み込んでいった。

……………」——応室内なんですけど。

扉の辺りが水びだしなんですけど……

シャルルはいつもこうだ。誰かが俺の悪口を言つとすぐに見境が無くなってしまう。

これが世に言ひヤンデレなのか……まあいや、さすがに殺されたりはしないだろうからセ・

それにシャルルは可愛いしね。やっぱり美少女は世界の宝だ。うん。

シャルルは振り返つて俺のベットにダイビングしてきた。うほつ

「えへへ……またやつちゃいました。」

かつ、可愛すぎるだろ――――

ふつ俺もこう見えて精神年齢27歳の大人だぜ。こんなことで挙動不審になるほどのやわい精神じやねえぜ。

仰向けになつて俺の上にまたがるシャルルに俺は

「本当にすいません、シャルル様。でも、俺みたいな下級貴族ではシャルル様には釣り合いません。だからもうここには来ないでください」

と話す。もつシャルルを俺みたいな奴に縛り付けたくない。シャルルは毎日のようここに来ては国の様子や学園での生活を話して言ってくれる。正直言つて嬉しい。それに俺はシャルルが大好きだ。だから、シャルルを縛り付けたくない。だから拒絶する。

シャルルは瞳に涙を浮かべる。その様は18歳とは到底言いがたいものだ。

「・・・ひぐつ・・・ひぐつ・・・わつ・・・私・・・私じや・・駄目なんですか・・ひぐつ・・」

なんていい子なんだ。身長が155センチくらいの華奢な体をしているシャルルは本当に11年前から成長していないように感じる。

「シャルルおいで」

俺はベットから上半身を上げて、シャルルを抱きしめた。やっぱりシャルルに本当の気持ちを聞かないと駄目だ。だから俺は

「俺はシャルルの事を愛している。でもシャルルは俺が側にいたら困るだろう「そんなこと無いです。私はシリウス様さえ居てくれたから何もいりません」・・・シャルル・・・」

この瞬間、俺は思った。俺はなんて馬鹿だつたんだろうと。そして俺が彼女を縛っていたんではなく彼女が自分からそつしていたことに気付いた。

俺の胸の中で泣く少女を見て、俺は彼女に見合ひの男になる。そう心の中であつた。

そして次の日。

「シリウス様ー」

ガチャ。

「あれつ・・・・シリウス様?」

ベットにはいつも居るはずのシリウスが居ない。

それどころか部屋の中には人の気配が無い。

一体何処に行つたのだろう?シリウス様がベットに居ないなんておかしい。

そう思つていると、後ろから人の気配がした。

「誰つ?」

振り返るとそこには黒いマントをはおりいかにも魔術師つて感じの人  
が3人居た。

魔術師の一人が

「これはこれは姫様ではないか。丁度いい。われわれと一緒に来てもらえますかな」

と言つてきた。そして姫は、

「私のシリウス様を何処にやつたの？」

逆に言い返した。シリウスは姫様の物らしい。

そして先程とは別の魔術師が

「あの方なら先程捉えました。あなたが抵抗しなければ、あの方の命は保障しますよ」

と言つた。もちろん姫は、シリウスが何か特別な力を持つてことは知っていた。それが何なのかは知らなかつたが昔、シリウスが姫を反帝国組織の刺客から救つたことをいまだに覚えている。

でも相手は魔術師が3人。いくらなんでもあの時の刺客とはレベルが違う。さすがにシリウスが特別な力を持つていても敵わないだろう。

そう思つた姫は

「わかりました。シリウス様には指一本触れないでくださいね」

と言つた。

すると3人目の魔術師が、

「この女のあの御方のところに連れて行く前に俺が味見してやるよ」  
そう言って近づいてきた。どうしよう抵抗したらシリウス様が、殺されてしまう。

魔術師の手がシャルルに触れそうになつた瞬間、吹き飛んだ。

他の魔術師は何が起こったのかわからないでいる。

それもそのはずだ。いきなり一人の魔術師が跡形もなく消し飛んだのだから。

「一体なにが起きた？」

残つた2人の魔術師の一人が口を開く。

かんじんの姫様もなにが起きたのかわからない様子。

すると残つた魔術師の一人がいきなり消えた。

残つているのは後一人だけ。

「なつ、なにが・・・なにが起きているつ！――！」

すると姫の前に一人の少年が立つていてる。

「きつ貴様だな!? 一体何をした!――！」

少年はもちろんシリウスだ。

「その質問に答える価値はない。お前らじゃ何者だ？」

魔術師は少年が出した質問を無視して逃げようとする。

「まつまずは形勢を立て直す必要がある。」

魔術師は呪文を唱えだした。

「光よ来たれ 我をかの地へ 導きたまえ」

魔術師は呪文を唱え終わる瞬間。気絶した。

もひりんやつたのはシリウスです。

「わひと・・・シャルル様。お怪我はございませんか？」

床に倒れこんでいるシャルルに手を差し出す。

そしてシャルルはその手を取つて・・・・・俺を引っ張つた。

下から引かれたせいで横たわるシャルルの上に倒れた。

とつたに俺は立ち上がる。そしてシャルルも。

見つめ合いつシャルルと俺。

「何処に行つていたんですか？心配したんですから。」

シャルルが泣き声で呟く。

「本当にすみません。なまつている体を動かしに行っておりました。

」

そう、俺は今日初めて家から出て色々な場所を見て回っていた。

帰ってきたら複数の魔力反応があつたからもしゃと思つたが、その通りだつた。

それでもシャルルには怪我一つでも無かつたから良かつた。

「シリウス様お体は大丈夫なんですか？」

「うん。最近体調が良くなつてきていてね、もう少ししたら完全に治るとおもうよ」

嘘です。すいません。本当は何處も悪いといふなんてありません。本当にスマセン。

心中で謝る俺。シャルルは俺が完全に治ると聞いて、すうい笑顔で喜んでいる。

シャルルは突然話を切り出した。

「お体のほうが良くなつてきたんでしたら是非、学園に入られてはどうでしょうか？シリウス様は何か特別な力を持つているようなので入学試験は楽勝だと思いますよ。」

たしかにこちらの世界の学校に行つてみたいと前々から思つてはいた。

「うん。 そうだね。 一ヶ月後にある入学試験を受けに行ってみるよ。

」

そう言つてこの日は別れた。

シャルルは帰る時に

「学園で私以外の女の子とイチャイチャしたらどうなるかわかりませんよ。」

と言つていたみたいだが、聞かなかつたことにしよう。何が起きるかわからないしね。うん。

後から知つたのだが俺の屋敷に入り込んでいた魔術師達は俺と姫の仲を妬んだ上級貴族の人々が送り込んできたらしい、俺を殺すために。この事実を知つた姫は、犯人を探し出してまあこれ以上は言わない方がいいだろう。うん。

明日から、屋敷の周りに防御結界でも張つて、一部の人しか入れないようにしておかないとね。でないと姫が侵入者を殺しちゃつかもしないからね。

～お姫様はヤンヒーなのだつ……（後書き）

次回いよいよ学園編突入です。

皆さん評価を・・・・・評価を・・・・バタンッ

次回お楽しみにー

## （満員列車は初めてだ）

現在俺はメッチャでかい門の前に居る。

今日は、セルドラント帝国学園の入学試験の日だ。

ちなみに俺は遅刻した。とにかくわけを聞いてほしい。

今日俺は、朝早くに目覚めた。もちろん今日が入学試験だつて事を知っていたから、そうしたのだがいざ準備をして列車に乗ると、満員列車の餌食になってしまった。おかげで俺は、学園がある駅を通り越して終点まで行つてしまつたのだ。しかもそれを3回も繰り返してしまつた。そのせいで俺が学園に着いた頃にはとっくに試験は终わり、受験生も皆帰つてしまつていたのだ。俺の中で列車がトラウマになった瞬間だつた。

はい言い訳終了。

どうしよう・・・・このまま家に帰つてもいいのだが、そんなことしたらシャルルに殺されてしまう・・・・本当にどうしよう。

俺は校門の前でウロウロする。はたから見たら、眼帯をしている举动不審な変人に見えるだろう。

俺が校門の前でうろついていると、突然後ろから話しかけられた。

いきなりだったので俺は体全体をビクッとさせた。

「あの～もしかしてシリウス・マリスミトヤさんですか？」

後ろを振り返つてみると、眼鏡をかけたいかにも真面目そうなお姉さんが立っていた。

とりあえず返事をする。

「はい、そうです。」

するとお姉さんが、

「学園長がお待ちですので、付いて来て下さい。」

と黙つて門を開けた。俺は言われるままに付いて行く。

終始無言の中、広い校庭をぬけてたどり着いた3階建ての校舎。

その中にお姉さんが入つていったので、後を追う。

そして三階に上がり、廊下の突き当たりに『学園長室』とかかれた部屋があった。

お姉さんは部屋の前に立ち止まると扉を軽くノックした。

コンッコンッ。

ノックの後、部屋の中からびくり、と聞こえたのでお姉さんが扉を開いた。

部屋の中は赤を基調とした物が多く見受けられ、一つ一つに気品が

満ち溢れている。

扉を背に真正面には見た目だけで相当年を取っていることがわかる老人が椅子に腰掛けていた。

「学園長。シリウス・マリスミティさんをお連れしました。」

静寂な空間にお姉さんの澄んだ声が響き渡る。つていうか、このいかにもボケてそうな人が学園長ってどうよ。今の時代こんなに髪を伸ばしているのは位だぞ。まあこっちの世界には居ないけど。

学園長はお姉さんに向かって

「案内」)苦煩、ミコシャ君。君はもう仕事を戻してくれ。」

と言った。それを聞いたお姉さんは「それでは、失礼します。」と言つて部屋を出て行つた。

あのお姉さんミコシャつて言ひ名前なんだーとか思つてると、田の前に居る学園長さんが俺に向かって話し出す。

「君がシリウス君か、君の事は前々から姫様に聞かされているよ。今日は君が来ると姫様に言わせて楽しみにしていたんじゃが、まさか遅刻してくるとは思わなかつたの~」

今思えばこの学園は帝国が運営しているから王族との関わりもあるのか、

「僕はどうすればいいんですか?」

一応ダメもとで聞いてみる。

「君には特別学級に入学試験免除で入つてもらおうと思つ。」

「ええつ！？」

学園長が凄いことをサラッといった。

この学園には大きく分けてそれぞれの学年に5つのクラスがある。魔力が高い者がいるクラスがAクラスでそれから順にB、C、D、Eクラスと振り分けられる。

図にするといふ感じ A > B > C > D > E

DクラスやEクラスに居る人達は皆、魔力が生まれつき無く庶民の人達が主だ。

ちなみに特別学級と呼ばれている学級はA～Eクラスとは別にあって、Sクラスとも呼ばれている。

たまに凄い力を持った人が居てそういう人が入るクラスとなつている。一つの学年に一人居るか居ないかのもの凄いクラスなのだ。なのでこのクラスに限つては学年が関係ない。つまり、12歳の子も居れば15歳の子が居たりするのだ。

この学園には全部で6つの学年と31のクラスが存在する事になるが、1クラスが大体50人ほどなので全校生徒は約1500人程だ。学年が関係ないSクラスの生徒数は現在12人らしい。俺が入ると13人になる。

「俺は別にかまわないんですが、本当に入学試験は受けなくてよろしいんですか？」

もしも入学試験が免除なら能力測定などのややこしい検査を受けなくてすむ。力が制御できるようになつたからと言って、何かの拍子で力が放出でもしたら大変なことになるからな。

「うむ。シリウス君が強いつて事は姫様から聞いておるから、入学試験は受けなくともけつこうじや。それじゃあ一週間後の入学式で待つておるぞ。」

俺は扉の前で一礼して、部屋を出た。スキップして廊下を走つてゆく。

少年が部屋を出て行つた後に老人は小さく囁いた。

「姫様もお人が悪い。自分のクラスに彼をお入れなさるとは……姫様の立場を考えてほしいものじやな。」

静寂な空間に老体のしゃがれた声が響き渡るのだつた……

「満員列車は初めてだ」（後書き）

本当に・・・スイマセン。予定が狂いました。

でもでもでも、何とか物語を進めれそうな気がします。

次回も頑張つて書きますので是非読んでください。^\_^

「入学式・前編」（前書き）

・・・ドゾ。

## （入学式・前編）

俺がセルドラント帝国学園特別学級 通称『Sクラス』に入学する事が決まってから1週間が経つた。

今日はセルドラント帝国学園の入学式の日だ。学園は列車で3駅越えた所にあるのだが・・・・また俺は満員列車の餌食になってしまった。

もひ・・・・・なにも言わないぜ・・・・・グスンッ。

前と同様、最後の駅に着いた時には涙が止まらなかつた。

ふいに終着駅のホームを見ると、セルドラント帝国学園の制服を着た腰まで伸ばした赤髪が印象的なお嬢様っぽい雰囲気の女の子が3人の男達に絡まっていた。

3人の男の一人が言ひ。

「お嬢ちゃん、もう逃げれないぜ。さつきはよくも俺達の仲間をぶつとばしてくれたな」

すると赤髪の女の子は

「あんた達から絡んで来たんじゃない。自業自得よ。私は忙しいんだから、そろそろ消えて貰えるとありがたいんだけど・・・・ダメみたいね。」

そう言い放つた瞬間、先ほど喋っていた男の顎に少女の膝蹴りがクリーンヒットした。男は音を立て倒れる。

ドサッ。

それを見た他の男二人が、声を合わせる。

「「てつ、テメー！ー！」」

そして残る二人の男のうち一人が少女に襲いかかる。

しかし少女はなんら動搖もせず、体を一步横に引いて目標を見失つた男の鳩尾に体重を乗せた右膝を入れる。男はドサッと前のめりに地面に倒れこむ。残る男はあと一人。仲間二人がものの数秒で倒された事に啞然として立ち尽くしている。そして少女が立ち尽くす男の顔面に体重を乗せた膝蹴りで止めを刺した。

「ふん。所詮クズはクズね。次からはナンパなんて惨めな真似しない事ね。」

少女は倒れている三人の男達を見下して腰に手を当て勝ち誇つていた。

するといきなり湧いて出たかの様に、少女の周りを50人ほどの男達が囲つた。

「この女あま～調子に乗りやがって。こうなつたら薬漬けにして高く売りさばいてやるぜ。」

さすがにこの人数では太刀打ちできないのか少女は顔をしかめる。

「数にものを言わせてたつた一人の少女を痛めつけようとするなんて最低な奴がすることね。」

そんな事を発する少女に男達のリーダーみたいな奴が口元を緩める。ニヤツ。

「最低？確かにそうかもしれないな。で、それがどうした？」

と言った。そして男は50人近い男達に、「この女を捕まえろ！！！」と指示を出した。

男達は少女に近寄る。

(もうひ・・ダメか！！)

少女は目を瞑つた。次の瞬間

ガタンッゴトンッ。ガタンッゴトンッ。

少女は揺れる列車の中に居た。

「一体？何が起きた？私はさつきまで駅のホームに居て、男達に囲

まれていたはず 「

少女が辺りを見渡すと、少女の隣に居眠りをする同じ年位の眼帯をした少年が居た。

(何で私は列車の中に居るの?それにこの男は誰?)

少女が身に起こうとした出来事を整理しようと思った時、少年の目が開いた。

「ん~良く寝たー。」

少女と視線が合つ。

「やつと起きたみたいだね。君の寝顔を見ていたらいつの間にか僕も眠ってしまったよ。」 一コツ

俺は出来る限りの笑顔をふるまつ。

やっぱり第一印象は大切だよね。前読んだ本にも笑顔がその人の価値を決めるって書いてたしね。

「なつ・・・／＼私の寝顔を・・・ずっと見てたんですか・・・／＼

(なつなつ何!？／＼この眼帯少年メツチャカツコイイ／＼これが初恋ってやつなの!？／＼)

あれ・・・顔が真っ赤になつてるよ。もしかして俺みたいな男に寝顔見られるの嫌だったのかな。

「本当にごめん。僕みたいな奴が君みたいなかわいいこの寝顔見てしまって。普通嫌だよね。本当にごめん。」

やつぱり謝つておかないとね。

「いや別に・・・嫌とかそんなんじゃなくて・・・むしろ・・・可愛いとか言われると・・・その・・・逆に嬉しかったり・・・キヤ／＼／＼／＼」

なんだらう声が小さくて聞き取れない。

顔が真っ赤な少女は急に何かを思い出したかのようご、声を張り上げて俺に聞いてきた。顔が近いんですけど・・・

「それよりあなた何者？一体何をしたの？」

やつぱりそう来るか。まあ時間を止めて列車に移動させたとか言っても信じないだらうから・・・

「僕は何もしていないよ。ただ、さつきホームで一人の男が現れて君を囲んでいた男達を一瞬で吹き飛ばしたんだよ。それで君は気絶しちゃって、その男の人人が僕に君を押し付けて消えたんだよ。」

さすがにこの嘘はないな。

「ふ〜んそうなの・・・。あつそういうえば私の名前言い忘れてたわね。私の名前はシルク・シャーロフイ。シルクって呼んでね。」

うわ〜信じてくれたみたい。この人単純だな。

「うん。わかつたよシルクさん。僕の事はシリウスでいいから。」

まあなんだかんだあって。学園がある駅で降りた俺とシルクさんは、そこで別れた。別に一緒に学園まで行つても良かつたんだけど、行きたい所があつたから駅に着いたときに別れた。シルクさんはまた学校で。と言つて手を振つていた。どうでもいいことだがシルクさん完全に遅刻だよな。まあ俺もだけどね。

俺はシルクさんと別れた後、先ほどの終着駅のホームに向かつた。

え？なんでかつて？それはもちろん俺が悪い人嫌いだからだよー。俺の用事つてのは、さつきまでシルクさんに手を出そうとしていたゴミ野郎共の成敗やー。

終着駅のホームに出たところであつきの男達がまだシルクさんを探していた。

「くそつ。何処に行きやがつた。あのアマーチ。お前らもつと良く探せ。」

リーダーらしき男が、指示をしていく。

俺はその男に駆け寄つて、

「バイバイ。」

と囁いた。

「ああんゴラあー。なんだテメー、ぶち殺されたいのか。俺に話しかけるんじやねーよ。」

次の瞬間、男はおろか仲間の男達まで消え失せた。

え？何したかつて？

飛ばしたのさ北極に。

俺は踵を翻し、颯爽と列車に乗り込んだ。もちろん誰も俺が男達を消したなんて思わない。

だつて皆の記憶塗り替えたもんね。いやー便利だよね超能力って。  
うんマジで。

このあと俺は入学式に5時間遅れで着いたとさ・・・

はあ～疲れたー。

＼入学式・後編／（前書き）

気がついたらPV3万超えてました。

この駄作を読んでくれている皆さん心から感謝致します。

それでは本文をどうぞへへへ

## （入学式・後編）

俺は、現在入学式が行われていた体育館みたいな所にいる。

体育館はもぬけのから。

（そりゃそーだよな。5時間も遅れたら終わってるよな。うふ。）

入学式なんてとうの昔に終わって新入生の皆さんは帰つていました。

あれっ？何でだろう、涙が止まらないぞ。グスンッ

うなだれる俺。不意に後ろから気配がしたので振り返つてみるとそこには学園長が居た。

「シリウス君。来ないから心配したぞ。まさかまた遅刻してくるとは思つていなかつたの～。」

「はあ～まあ来る途中に色々あつまじて、本当にすいません。」

「別に遅刻したからつて罰を下えたりはせんよ。それよりも君は寮で暮らすのじやろ。ならば誰かに案内をさせよ。」

「あっ、はい。ありがとうございます。」

そりゃ、俺はこの学園の寮に入る事になつてゐる。しかも合格通知と一緒に届いた学校説明書を読んだ限りでは、クラスの生徒は1人部屋らしき。

「それじゃあミコシヤ君、彼を頼む。」

「

学園長が後ろを振り返って言った。

すると学園長の後ろから、この前俺を案内してくれたミコシヤ先輩が顔を出した。

「わかりました。それではシリウスさん、私について来てください。

」

「は、はいっ」

俺は言われるままについていった。

そして歩く事30分。

「着きましたよ。」ヒジがシリウスさんが新しく入る寮です。

ミコシヤさんが視線を向けた先  
そこには下級貴族の俺の家よりも立派な屋敷が立っていた。

「凄い。」

あまりの豪華さに声が漏れた。

「凄いですよね。私もいつか強くなつて。この寮Sクラスに入るのが目標なんです。」

田の前にある。屋敷もといSクラス寮を眺めながらミコシヤ先輩は

言つ。

先輩ならきっと大丈夫ですよ。そう言おうと思つたが止めた。俺みたいに入学試験も受けずに姫様のコネで入ってきた奴が努力して入るとしている人に言つても意味が無いと思ったからだ。

でも・・・俺は

「先輩、俺みたいな奴が言つのもなんですが絶対に来てください。Sクラスに。俺はずっと先輩を待つています。」

先輩がSクラスに入れるのを心から応援しよつと思つ。

「シリウスさん／＼／＼それはもしかしてプロポー・・・・ゴニョ・・・・／＼／」

なにを言つてるんだろ？ってやつぱり俺みたいな奴がこんな事言つたから怒つたのかな。先輩、顔が真つ赤になつてゐる。

俺は顔が真つ赤？な先輩に「案内ありがとうございます。」と言つて寮に入った。

シリウスが行つた後にミリシャは呟いた。

「絶対にSクラスに入らないとね。シリウス君が待つてゐるから・・・

・・・・・キャ／＼／＼

この日ミリシャがシリウスさんからシリウス君に呼び方を変えた事は本人以外誰も知らない。

## （入学式・後編）（後書き）

正直に言います。本文短くてスイマセンスイマセんスイマセン。

ここで言い訳をさせていただきますと、前編と後編はもともと一つ  
だったのを無理やり2つに分けて、改文したからなんです。

だってだって・・一つの話にヒロインが一人作られるって納得いか  
ないんだもん。

いや本当に本当にすいませんでしたっ――！

## ～寮にてヤンパー～（前書き）

始めに書かせておきます。なんか・・・すいません。

いままぜかとっても謝りたい気分です。ごめんなさい

## ～寮にてヤングトレー～

現在俺はミコ・シャ先輩と別れて、寮に入つた所だ。

寮つて言つたか屋敷だよね。うん。

寮と言つたのは豪華すぎる内装を眺めながらひそかに思つてること田の前にメイドさんが現れた。

「初めまして。シリウス様。私はこの寮の管理を任せられているリーザ・クライアンと申します。お呼びになる時はリーザとお呼び下さい。」

メイド リーザさんは頭の後ろで金髪と言つよつとは少し黄色っぽい髪を一つに纏めている。これが世間一般で言つぱーーーテールと言つるものだらう。身長は160より少ししたくらいで胸も残念な事になつてゐる。顔もまあそんな体系に比例してか幼くみえる。リーザさんはシャルルに近い体系だ。俗に言つ口リツテやつ。俺は前の世界ではシス&ロリコンだったからこんな可愛い子を見ると愛でたくなる。

そんな事を考へていてリーザが俺を部屋に案内してくれた。

「リーザがシリウス様のお部屋になります。冷蔵庫の中身などは定期的に仕入れさせていただきますので」「承下さー」。

「あつ、はー。そのほうが助かります。ありがとうございます。リーザさん」「コッ

リーザさんいい子だな~見てるだけで癒される~。

「・・・／＼そつ、それでは、わたっ私はこれで／＼

リーザさんはそそくわと部屋を出て行った。

あれっなんだらう。俺がリーザさんの顔ばっかり見てたから怒っちゃったのかな。

部屋を出て行くリーザさんの顔がほのかに赤かったような気がした。

部屋には冷蔵庫や机、ベット、キッチンなど生活に必要なものは揃っていた。もちろんトイレやお風呂もあった。俺がベットに横になると・・・

ぐづうー

俺の腹の虫が鳴いた。

現在の時刻は13時30分。本来なら昼食を食べる時間はもう過ぎているのだがこの学校に来る途中でいろいろあつたせいにまだ昼飯にありつけていない。なのでベットから起き上がり部屋に備え付けてある冷蔵庫の前に立つ。冷蔵庫を開けてみると肉やら魚、そのほかに今まで見たこともないような野菜や果物が入っていた。

ここに俺の特技を教えよう。それは料理。料理なのだ。

重要な事なので一回書つときました。

前の世界では妹と二人暮らしだったので、実質家事全般を俺が行つ

ていた。

だから必然的に俺の料理は口を追つ事にレベルを上げていったのだ。  
今はもうプロ顔負けの腕前と自負しているが、こちらの世界では料理を一回もしたことがない。

なんてつたつて貴族ですから。

こちらの世界で料理したことがない＝未知の材料、なにそれおいしいの？

つていう公式も成り立つたりする。でもそこは俺の料理人魂が意地を見せる。

俺は冷蔵庫の中にあつた未知の食材全てにかぶりついた。

ムシャムシャムシャムシャムシャ・・・・・

未知の食材を俺の料理人（自称）としての舌が味わう。

ムシャムシャムシャムシャ・・・・ガリツ・・

「ガリツ！？」

俺の手には未知の食材Xがあつた。

他の未知の食材はやわらかく人参や大根、とうもろこしみたいな味をしていたのだがこの食材は違つ。

味が無いとかそんな問題ではなく硬いのだ。今まで噛んだ事が無い硬さ。

もちろんそんな硬いものを食べようとした俺の前歯は砕け飛んでいる。口内には鉄の味がする。そして俺の血の味。

痛い。とてもなく痛い。常人なら泣き叫ぶほど痛さだろう。

しかし俺の願い事の一つ『最強の肉体』のおかげで砕けた前歯はすぐさま元通りになった。

今はやばかった。いやほんとマジでやばかった。

俺は料理をすることなく昼飯は未知の食材達だけでお腹がいっぱいになつた。

ただひとつもう一度とあの食材は食べなによつて心から思つた。

俺はうなだれるように備え付きのベットに仰向けになつて、瞳をとじた。

『昼寝』誰が考えたんだろうこのフレーズ。考えた人はきっと無職だったんだろう。

お腹がいっぱいになつた事もあり俺はすぐに眠りに付いた。

「ん・・・・うん・・・」

今、俺は寮の自室にて昼寝と言つ最高の暇つぶしをしていたわけなんですが、違和感を感じて目を覚ました。いつもより体が重いと感じて自分のお腹辺りを仰向けの状態でみてみる。

そこには　　俺の体をベットとして使うシャルルの寝顔があった。  
シャルルの体は小さい。だから体重は軽いわけで、別に嫌なわけでない。

むしろこんなに可愛い女の子が俺の体の上で寝ているところだけで幸せいっぱい腹いっぱいだ。

俺はいつのまにかシャルルの頭をなでていた。

「シャルル・・・・・大好きだ。」

俺の気持ちはどうやら言葉に出していたらしい、寝ていたはずのシャルルが急に目を見開いた。

「シリウス様ー。いまなんていいました?」

きっと俺が頭を撫でている時から起きていたに違いない、なんてやつだ。

「いつ、いや何も言った覚えは無いですが、シャルル様の気のせいではないですか。」

恥ずかしくて視線が合わせられない。シャルルはむづと唸つて、ベットから降りる。

「シリウス様、なんで入学式サボったんですか?」

シャルルが俺に聞いてくる。なんて答えたものか。

まさか美少女を助けて遅れたとはいえないし・・・・・・

「みつ、道に迷っちゃいました。」

「ふうんなんだそだつたんですか。私はてっきり悪者に追われて

いの美少女を助けてたんじやないかと思つてました。

…………嘘だろ。 あわか

「 あわか・・・見てたんですか？」

恐る恐る聞くにてみる。

シャルルは二口lichと微笑む。

「 やつぱつやつだつたんですね。」

「おおおおおおおおおおおおおお、ほめられた――――――――――――――――――――

ちよ、シャルルさん怖いですつて。田が逝つちゃつてしまつて。

「・・・私なんかよりも・・・シリウス様は他の女の子と西の壁が  
楽しいですね・・・」

ちよ、何処から出したのそんな鉈。あなたのポケットは某〇型口ボ  
ツトの四次元ポケットなんですか?

ちよ、そんな殺氣出して近づこひこないでください。助けてー△〇  
えもへん。

「シリウス様は誰にも渡しません。 いつそ私の物にならないのなら・

・」

ちよ、ヤンキーで自重してください。 いつなつたら仕方が無いあの手

を使つか。

実は一年前にもシャルルがヤンデレ全開状態になつた事があつた。あの時は俺がメイドさんと楽しく会話しただけだったが、殺されそうになつた。

俺はその時にシャルルをなだめた手を使おうと思つ。

鉈を持つシャルルに近づき魔法の言葉を囁く。

「君を愛してゐる。」

そしてそのままシャルルを抱きしめる。俺の胸辺りしかない身長のシャルルは俺の胸に頬をスリスリしていく。そして俺を見上げて「許してあげてもいいですけど一緒に風呂に入つて寝てください。」「う～上田使ひって反則だ。こんな可愛い顔されたらどんな男もいちいちだつて……いやマジで。

変な汗が吹き出でくる。どうしようどうしようどうしようどうしよう、仮にも相手は一国の姫。もしも色々やバイ方向に事が進んだらシャレにならない事になる。

「ダメ……ですか……？」

そんな目で俺を見ないで―――さつきのヤンデレは一体何処に消えてしまつたんだー

「わっわかりましたよ。今日だけですかうね。」

シャルルはパアッと明るい顔に変わり、早くお風呂に入りましょう。

なんて言つて来る。

部屋の奥にあるお風呂場のほうに行くシャルルの背中を見ながら俺はため息をつく。

「あんな可愛い子が俺みたいなダメ男の何処をすきになつたんだろう？」

恋愛は謎だ。なんて思いながら俺はシャルルの後を追つた。

## ～寮にてヤンクトレ～（後書き）

まさかの次回に続くパターン。

・・・・・とりあえず逝つてきます。

え？・ビーハー、なんてシッ ロリせしないでくれるとありがたいです。

あつそりだ、年始はおひつと更新遅れちゃいます。まあ家庭の事情  
つて事で^ ^ :

次回はビックリわくわくロココ子お姫様との入浴＆睡眠です。

シルクの件はこの話が書きたいがための布石だつたりします。まあ  
他にも派生はしてるんですが、次回楽しみにしててください。^ ^

それではグッバイ( )-

～おはなせむかへおへりさひなん ～（前書き）

・・・・・ 本当にサーセン。 ^ ^

駄文ヒヤツホーリ・・・作者壊れきました。

まあ読んでみてください。

へんなふうにわくわくうらららりとらん へ

「シリウス様ー 早く入ってくださいよー」

「いっ、今行きますっ」

やばいぞ〜ノリでわかりましたなんて言つてしまつたが、相手は、18歳の女の子。かたや俺は肉体的に15歳の男の子。

そんな一人が一緒にお風呂に入るつて・・・・・・マジでやばいよな・・・しゃれになんねえーぞ・・

えええい、こうなつたら仕方が無い。俺も男だ。一度OKと言つてしまつたからにはやるしかない。

と言つことで俺は意を決して服を脱ぎ、大事なところにタオルを巻いてお風呂場に行く。

ガチャ。

お風呂場に繋がる少し硬めの戸を開けた途端にタオル一枚のシャルルが俺の胸の中に飛び込んできた。

「シリウス様ー」

「うわっ、危ないですっ！ シャルル様。」

シャルルは俺の胸とお腹の中間らへんに頬を擦り付ける。スリスリスリスリ。

ちなみに現在の俺、大事なところ以外はスッポンポンなわけで生でシャルルの肉体と触れ合っている事になる。（注意・変な意味じゃないよ。うん。）

「あ・・・あ・・・あ・・・ハア・・・シリウス・・・  
様・・・の・・・体・・・・はあ・・・  
・・・はあ・・・・」

ちょwww、姫様じんだけ興奮してるんですか、そろそろ離れてほしいんですけど・・・

俺はなんとかしてシャルルを引き離そうとする。

は・・・離れない！・・・じんだけ力強いんだこの子は。

仕方が無いので俺はシャルルを抱き上げる。抱き上げたときに「キヤ、シリウス様そんなに私のことを・・・」なんて言っていたが気になることにする。

シャルルは例のごとく身長が低いので俺が抱き上げると足が床につかなくなる。なので俺はそのまま浴槽に入る。案外浴槽が広い事に驚いたがそんな事には気が回らない。なんてつたつてこの俺にしがみ付いている女の子をどうにかしなければならないからな。

さてと・・・・・どうやって離そつか・・・「愛してる」はもう使つてしまつた（しかも裏田に出てしまつた）し・・・・あの手は俺の貞操が危うい事になるし・・・・・よしあれをするか。

俺はシャルルの顔を両手で優しく掴み、俺の顔の前に寄せた。そし

て・・・・・チユ。

キスをした。もちろん唇にね。仕方ないじゃないかこれしかなかつたもん。べつ別に俺がキスしたかったとかそんなんじゃないんだからねつ。

「

「

シャルルは声にならない叫びを上げている。顔は茹蛸のように赤く、目の焦点があつていらない。ちょっと刺激が強すぎたかなと俺が思ったのも束の間、シャルルが俺の顔に手をそえてきて・・・・・・

ちゅ・・んちゅ・・・・・ちゅ・・・んちゅ・・・・・ふはあ

キスしてきやがつた。しかもでいーふだぜ、でいーふ。

いつの間にこのお姫様はこんな遊びを覚えたんだ。（まあ半分くらいは俺のせいだとしても・・・・な）

「はあ、はあ、シリウス様ベットに行きましょ・・・・・

おいおい今の展開でそんなこと言われたら考えられる結末が最悪の方向だぜ。しかし俺はその結末を覆して見せるぜ。俺はなんとしても俺の貞操を守り通してみせる。俺の本能が貞操を守れと叫んでいるから俺はそれに従うまでさ。そして今の状況で俺がしなければいけないことは・・・・・

「シャルル様、まずは頭と体を洗いましょう。」

とつあえず風呂から上がらないとね。うん。

「わかりました。シリウス様も早くしたいんですね。よーしね  
つとあがつてベットに行きましょ。」

お~おいこの子、変な誤解してるぞ。ってか姫様つてこんなエロキ  
ヤラだつたか？

まあ早くあがる事さえできれば俺の勝ちだ。気づかれずに逃げる方  
法なんていくらでもあるからな。

「それじゃあ私は早めに行つて準備しておきますのでシリウス様は  
服を脱いでベットにきてくださいね。」

準備つて・・・なんのだよ。

まあなにはともあれなんとかお風呂からあがる事には成功した。こ  
のまま逃げれば・・・・・・・・

「シリウス様～ 早く来てください～

ナンテコッタ。脱衣所的なスペースで服を着替えて終わつて逃げよ  
うかと思つた瞬間、シャルルが来てしまつた。どうしようどうしよう  
うどうしよう。俺がここで力を使って逃げたら、俺の力がばれてしまつ

・・・・

「ほやくほやく～

シャルルが俺の手を握つてベットまで行く。

「 ああシリウス様、一緒に寝ましょうね。」

やばい。本当ひじょう。

シャルルは俺のベットに入る。俺はシャルルに腕を掴まれているのでシャルルの横に入る。

「 はあ・・・はあ・・・つこにシリウス様と一緒に寝ます田が来たんですね・・・はあ・・・はあ・・・」

ちょ息が荒いって。なに考へてるの、このお姫様は。そろそろマジでヤバイな。仕方がないか・・・

俺は簡単な魔法を唱える。といつても無詠唱だから聞き取る事は不可能。

お姫様はいつのまにかスヤスヤと寝息を立てている。

俺が唱えたのは眠りの魔法。どんな魔法かといつと・・・・・・わかるよね。

まあそんなこんなで俺の直操もとい宝はまもられたのであった。

寝言でシャルルがシリウス様にまとわりついみどもは私が消す。といつていたが気にしない気にしない。

今日、俺は結局部屋の隅にあるソファーで寝ることとした。

はあ～結局夜ご飯たべてないな俺。明日からの学園生活大丈夫かな～など色々な事を思いながらもいつの間にか俺もスヤスヤと寝息を

立てこもるのであった。

～おはなせむわべやくひさひさん～（後書き）

はあ～久々の更新。

なんていうかこの5日間は苦痛以外の何者でもなかつた。でも神戸牛はおいしかつたです。1キロも買つたんですよ。親戚との新年会的なものはなんとなく楽しかつたですが、いとこの女の子に不覚にも萌えてしまつた・・・OTL

まああんなこじんなで今年もよろしくお願ひします。

小鳥がペヤンペヤンと轟く音が響き渡る澄んだ空気がおいしい朝、俺は目覚めた。

「ん……もう朝か。」

そういえば昨日はベットがシャルルによつて使えなくなつたからソファーで寝たんだっけ。

俺は普通の革張りのソファーよりも少し柔らかい感触のソファーから起き上がりついた。

・・・・あれ、おかしいぞ。体の上に何かが乗つているぞ。まあ最早言つまでもないけど一応言つておこうか。

「シャルル様。起きてください。」

「ん・・・えへへへ・・シリウス様の臭い・・・」

おい、絶対こいつ起きてるだろ。じゃないとベットからソファーまでどうやって来たって言つんだ。

シャルルは毛布を挟む事無く、じかに俺の体の上に載つているわけで（ちなみに服はきてるよ）、俺の胸辺りでさつきからクンクンと臭いを嗅いでいる模様。少しこちよばゆい感じがする。

まあ臭いを嗅がれるのは誰だつて嫌なわけで、俺はシャルルの耳元にまで顔を寄せてある言葉を囁く。

「今起きたら、『テートして…』

その瞬間。

ガバッ。

「『テートしてくれるの?』

やつぱり起きてたよ！」のサ。

「いや、『テートしてあげようかな～』と思つたんですけどやつぱりやめです。」

まあ最後まで言つたわけじゃないしね。

「うへーだまされたー。シリウス様の嘘つきー

なんとでもおっしゃいなさい。今日から学校生活が始まつてのにてートなんか行くわけないでしょ。

俺はソファーから改めて起き上がり、先ほどから頬を膨らませている（可愛らしい）シャルルと一緒に寮内にある食堂に向かつた。

「それにしても凄いですね。」

「本当に凄いですよね。私も最初に見たときはシリウス様と同じよ

うな気持ちでしたよ。」

Sクラス寮の食堂は凄かった。今年、俺を入れてSクラスは13人しか居ないつていうのにこの食堂は軽く見積もっても100人は入れるほどの広さに加えて、置かれている装飾品は見ただけでそれが価値のある物だとわかつてしまふほどの品々である。

あれ、なんでだろ？。Sクラスの食堂なのに俺とシャルル以外誰も居ないぞ。

俺は食堂の端から端までを見回す。

俺の様子に気づいたのかシャルルが話しだした。

「Sクラスは授業が自由参加なので、朝から起きている人は少ないですよ。それに食堂を利用する人も少ないんですよ。みなさん自室に料理を運んで貰つたりするので。」

「なるほど、そういうことですか。」

それにしてせんに豪華な食堂を使わないつて、どんなに贅沢なやつらよ。

つてゆうか初めて知つたぞ、授業が自由参加とか先生涙目だろ。

少し苦笑いを浮かべる俺。

とりあえずシャルルに席に座りつといつて、一番端にある席に座る。

料理はメイドさんが持つてきてくれるらしいので、そのまま席で待

機だ。

5分ぐらいしたらメイドさんが料理を運んできた。

まあなんと言つか一般的な朝食よりかなり豪華な朝食だが、味は不味くも無く格段にいいってわけでもなかつた。まあ普通においしかつたけど。

朝食を食べ終わり横に座つてゐるシャルルを見ると、まだ眠いのか目を擦つてゐる。正直、メッチャ可愛い。ついつい愛でたくなるが、ここは我慢だ。うん。

朝食も食べ終わりシャルルと一緒に席を立つた所で食堂の入り口を開いた。

「おはようございます、シャルル姫。今日も見事麗しい姿、拝見できて至高の喜びでござります。」

なんだコイツ。もしかしてコイツもクラスの人か。

食堂の扉を開けて入つてきたのは、なんていっかいにもナルシストな奴だった。

肩まで伸びたストレートの金髪をなびかせながらシャルルの前にまで來てる。

顔は・・・・微妙。まあ中の上つて所かな。

とつあえずキザ男と呼ぶことじよ。

キザ男は俺に氣づくと鼻で笑つて、

「まさか姫様、召し使いを雇つたんですか？」

と皮肉氣味に言つてきた。

カツチーン。

さすがにいかに寛大な心を持つている俺と言えどこれには怒るつて。いやでも、ここで何か変な事をしたら色々な意味でやばいから、仕方無いことは自己紹介でもして仲良くしようではないか。俺ってなんていい奴なんだ。

「はじめまして。僕の名前はシリウス・マリスミティ。シリウスつて呼んでください。あなたの名前は？」

うん、最高の自己紹介だな。キザ男を見てみると、自分の皮肉が利かなかつたことに若干目を見開いて驚いている。しかし、キザ男はこの程度では敗れないのか同じように自己紹介してきた。

「ふんつ。僕の名前はパーム・ネピア。呼ぶ時はパーム様と呼ぶよう」。わかつたか召し使い君。」

ブチブチブチ。

やつぱダメッぽいわ。俺は今、怒りと言ひ知の覚せい剤に支配されてしまつていて。

俺がこのキザ男改めパーム野郎をどうにかしようとした時、俺の隣でわなわなと震えているお姫様が口を開いた。

「ネピアさん。あなたは今、もつとも侮辱してはいけない人を侮辱してしまった。」

「ちょ、ここでまさかのヤンデレ解放ですか？さすがにヤバイと思いますけど・・・つてお~い、目がうつろだぞー、しかもパークの奴何が起きてるかぜんぜんわかつてないぞー

シャルルがあの呪文をつぶやく。

「流れ出る青き水よ その力を形に変えて 我に仇なす者を退けよ

その後どうなったかは・・・まあ言わないでもわかるでしょ。

まあなんだかんだで今日から学園生活スタートだぜーーー！

## ～学園生活～（後書き）

なんていうか・・・・すいません。

眠い。眠すぎる。

終わり方がひどい、ひどすぎる。

ああ、ペイントボールを当てないで。作者は何処にも逃げないから。

## ～学園生活2～

現在俺は食堂での件を終えてシャルルとのクラスの教室に来ている。

最初に一つ言わせてくれ。

広つ！…！

何が広いかつて？それは・・・・この教室だよ。

なんなんだよ、俺が元居た世界の教室の3倍の広さはあるぞ。

しかもだ、こんなに広い教室なのに席に座っているのは俺とシャルルを除いてわずかに3名。

おかしくないか!? いくらクラスが授業免除だとしても、13人の内、たった5名しか授業を受けないなんて。まあこっちの世界での授業を受ける受けないの概念は置いておいてだ。

俺がそんな事を思つていると、教室にいる3人が話しかけてきた。

ここにで3人の姿を述べておこう。

一人目

名前は当たり前だが知らん。

身長は165～170センチくらい。

年は16、17位だろう。

髪は肩と腰の丁度真ん中位で特に縛つたりはしていない（ストレートヘア）。ちなみに髪の色は薄い赤だ。

瞳の色は赤でクリクリッとしていて小動物を思わせる。まあそこそこに美女って感じだな。訂正、正直言つてかなりの美女だが、俺はかなりのロリコンだつたりするので興味なし。

## 二人目

名前は・・・・このくだりはいらないか。

身長は145～150センチくらい。

年は13、14位だろう。

髪は長めで腰を越えて、膝辺りまである。こちらも一人目と同様に髪を縛つたりはしていない。ちなみに髪の色は濃い青。

瞳も青く、なんかクールビューティーって感じ。きっとシンデレラってやつだな。顔はかなりの童顔なのに胸が何故かある。きっとBからCの間くらいだな。正直言つて胸なんていらん。無ければ最高のロリ子なのに・・・

## 三人目

名前は・・・・。

身長は165～170センチくらい。ちなみに言つておいたつ男だ。

年は同じ位かな。身長が少し小さいかな。ちなみに言つてなかつたけど俺の身長は175センチだ。

髪は薄い金色で襟足が長い。そして、かなりのイケメン。（イケメンなんて死ねばいいのに……）

爽やか系つて言つのかな。王子様つてこんな感じ。つて言われたら納得する容姿をしている。

とまあこんな感じの女子2人と男子1人だ。

その中で王子様（仮）が俺に話しかける。

「俺の名前はシルヴェス・リイルド。シルつて呼んでくれ。お前の名前は？」

こいつ話し方が外見と合つてないぞ……

とつあえず俺も話を合わせる。

「・・・シリウス・マリストニア。シリウスつて呼んでもれればいい。」

始めに言つておくが俺は男と話すとき（自分より田下な奴に限つてだが）、無愛想になる・・・・なんて言つた男が言うのもなんだが

嫌いなんだよ、男が。俺は女の子が大好きなんだ。と言つてもシャルルが一番だけだ。（更に言つとヤンデレ状態じゃないシャルルが一番だ。）

とまあこんな感じで無愛想に返事を返した俺。シルは「無愛想だな」と言つて苦笑いをした。

そして次に、クール口うりな女の子が話しかけてきた。

「私の名前はリーザ。リーザ・セルドラントよ。」

「え・・・!?」

ちゅうと待てよ・・・今確かにセルドラントって言つたよな。

「セルドラントって事は・・・姫様！？」

思わず口から出てしまつた。

「そうよ。あなたの事は知つているわ。お姉さまに死ぬほど聞かされたから。」

姫様  
リーザはシャルルのほうを見やる。

シャルルは俺の事をリーザに話していたことを知られて恥ずかしかったのか顔を赤くして俯ける。

知らなかつた。まさかシャルルに妹が居たなんて。しかしおかしいよな。なんでシャルルは俺に妹が居る事を教えてくれなかつたんだ？俺は気になつてシャルルに耳打ちする。するとシャルルは

「だってシリウス様の事をリーザが好きになつたら困るから・・・」

少し涙目で訴えて来た。しかしそんな事は無いと思う。うん絶対に無い。だって俺、顔は悪くは無いと思うけど何処にでも居るような顔だしなにより眼帯とか付けて雰囲気最悪な感じだからな。（シリウスはイケメンが嫌いなくせにシリウス自身がありえないほどのイケメンだったりする。さらに言うと、シリウスが付けている眼帯はシリウスのかっこよさをより一層際立てている。しかしながら本人は自分がりえないとカッコイイ事に気付いていない。鈍感。b  
＼作者）

とりあえず、二人の紹介は終わった。そして最後に3人の中で一番大人っぽい女の人が自己紹介をしてきた。

「私の名前はミリア・サージェス。よろしく。」

ミリアさんは手を差し出してきた。俺は差し出された手を握る。世間一般に言う握手だ。

ミリアさんは握手した手を離す瞬間、俺にしか聞き取れないほど小さな声で

「シリウス君、授業が終わつたら私に付き合つてくれないか？」

と言つた。なんだろ？？と思いながらも俺は頷いた。

自己紹介が終わつたところで、チャイムが鳴つた。

俺はとりあえず空いている席に座る。隣にはシャルルが座つた。

ガラガラガラと教室の前のほうの扉が開かれる。

そこから入ってきたのは、少し目つきが怖く後ろで縛つた長髪のポニーテールが印象的な女の先生だった。

その先生は教壇に上がるやいなや、大きな声で話出した。

「よーす。私が今年一年このSクラスを受け持つ事になつた担任のアイリスだ。お前らの事ビシバシ鍛えていくからそのつもりでな。」

ね・・・・熱血教師だ。

「そうだ。明日、クラス対抗闘技大会があるから適当に2人参加者を決めさせて貰つた。」

「　　え！？」

みんなハモつてしまつた。てゆつか嘘だろ。入学早々闘技大会なんて・・・バカだらうこの学校。

勉強しろよ勉強。

「えーちなみに参加者はシリウスとミリアだ。」

「ちょっと待つてください。」

当たり前だが俺は講義する。

「あーちなみに言つておくが、もしも不参加なんて事になつたら色

「やばい事になるから気をつけたほうがいいぞ。」

なんだよその言い方。メツチャ怖いじゃねえか。これじゃあ参加するしかないじゃないか。

「意義あり。」

「」シリヤが声を上げた。

「なんでシリウス様が私以外の女と一緒になんですか？」

ええええええええええええ。意義つてそこかよつ。せめてもひつよつと別の方向で抗議してほしいんだが

。

「とにかく参加はもう決まった事だから、抗議は一切受け入れない。わかったな。」

シャルルは「ふーふー言つていたが最終的にはわかつたようだ。

そしてそつなく授業が終わり、俺は明日の打ち合わせとシリヤの部屋に行つた。

「初対面で呼び出したりしてすまないな。シリウス君に少し聞きたい事がある。」

真剣な眼差しでシリヤが話し出す。

「なんですか？」

「シリウス君と先ほど握手したときに感じたんだが君の魔力は一体どうなっている？それと君の眼帯は見たところ何かの封印のようだが一体何のためにしている？」

「…………。」

「うやら気付かれたらしい。しかし、まさかこの事に気づくとは、さすがにクラスの生徒ただあるな。だって俺が魔力を抑えるすべを完璧にマスターしているにもかかわらず、俺の魔力に気付いたのだから。しかも俺の眼帯がただの眼帯じゃない事にも気付いている。」

「…………どうやって誤魔化そうかな…………とりあえず言つてみるか。」

「僕は生まれつき体が病弱だったんです。しかも常人じゃ考えられないほどの魔力を持っていました。この眼帯がないと魔力が放出して病弱な体は耐えられません。なので僕はこの眼帯で力を抑えています。わかつてもらいましたか？」

適当に考えた話だが、合点はいく。

「なるほどな。そういうことか、それならば理解できる。すまないな、無粋な事を聞いてしまった。話はここまでだ。明日に備えてシリウス君も部屋に戻つて早く寝るといい。」

ミコアさんがそう言つたので俺は「失礼しました」といつてミコアさんの部屋を出て自室に戻つた。

部屋の扉を開けた時にシャルルが俺のベットの上で

「はあ・・・はあ・・・・ああ・・・・シ・・リウ・・ス・・様・・の・・臭・・・い・・・はあ・・・・ああん・・・」

凄い事になつていた。

あわてて俺は、ベットに行きシャルルをシーツから引き剥がす。

シーツはシャルルの涎で凄い事になつている。

シャルルは俺が部屋に戻つてきた事に、今氣づいたのか顔を真つ赤にして部屋を飛び出していった。

ビリジョウ・・・・・シーツ。

まあとりあえず明日は闘技大会だから、早く寝よう。

ベットはシーツがヤバイので、またソファーで寝た。

「明日ビリジョウ・・・・」

疲れていたのかあつといつ間に俺は眠りについた。

## ～学園生活～（後書き）

ねむーーー

最近思つたんですが、作者は評価とかアクセスに振り回されてる気がします。

この小説は自己満足で書いているはずなのに、いつの間にか評価が気になつたりアクセスが気になつたり・・・もつ気にしない事になります。

多分そのほうがもつといいものが書けるような気がします・・・スマセソ、ちょっととかつこつけちゃいました。でも本当にわかつっています。

それでもこの駄作を読んで下さっている方が居る事を心の底から嬉しく思っています。^ ^

なので作者の事は気にせずに読んでください。^ ^

長つたらしい話をスマセソ。これからも是非、今作を読んでいくてください。

それではおやすみなさいです。

体に違和感を感じて、俺は目覚めた。

体にかかっている毛布をはぐと、俺の胸辺りにスヤスヤと寝息を立ててるシャルルの姿があつた。

違和感とはもちろん「いつ（シャルル）」のことである。

毎度の事ながら呆れてしまう。つてゆづかどづしゃって部屋に入ってるんだろう？俺は鍵をかけてるはずなんだが……まあそこいらへんは深く考えないよつてしよう。うん。

取り合えず壁に掛かっている時計を見る。時計の針は3時29分を指していた。

ぐう〜

丁度時計の針が3時30分になつた時、お腹が鳴つた。

よくよく考えたら昨日は学校初日で午前授業だけだったんだ。しかも疲れていたから（精神的に）昼飯はもちろんのこと夕食も食べずに寝てしまつたんだ。お腹が減つているのも頷けるな。

俺はシャルルを起こさないよつて体から引き剥がす……つてあれ？剥がれないぞコイツ。この小さな体の何処にこんな力があるんですか？このままでは空腹でやばそつなので仕方が無いからシャルルを起こす。

「シャルル様。起きてください。」

・・・・・・・起きない。更に言つと、顔を俺の胸にグリグリしてくる。すこしきすぐつたい・・・・つておい、こいつ（シャルル）絶対に起きてるだろ。毎回このパターンだからわかるつて。でも可愛いな、この姿見るととっても愛でたくなるよ。なんてつたつて今のシャルルの格好は田いヒラヒラのワンピース一枚だぜ。つておい、呑気に状況把握している場合じやないだろ俺。そろそろ腹が減りすぎて氣絶しちゃうよ俺。

俺はシャルルを起こすために抱きしめた。

『ああ、ううう。』

一見普通じゃない起こし方だが、まあこの子の場合は空寝だから案外効く筈だ。

「あつ・・・・・シ・・リ・ウス・・様・・・・・／＼／＼

案の定効いたみたいだ。

「やつぱり起きてたんですね。シャルル様。」

俺は少し荒んだ目でシャルルを見る。

するとシャルルは、

「だつて、だつてシリウス様は私の・・・『ヒョウヒョウ／＼／＼

なんか凄い事を言つてるみたいだが、気にしちゃ駄目だ。

会話をしているだけで腹が減つてくる。

・・・ ひとりあえず何か食べよつ。

俺は頬を真っ赤に染めているシャルルを尻目にソファーから立ちあがつて備え付けのキッチンに行き冷蔵庫を開けて中から前に試食した食材A（名前は知らん）と厚い肉を取り出す。ちなみに食材Aの味と形は俺が前にいた世界で言うと、味がどうもろこしで形が人参みたいな感じだ。ついでに言うと色は黄色。

俺はそのどうもろこしもどきと何の肉かは知らないけどとりあえず高そうな肉をフライパンで焼く。

ジユージュ。

なんかいいに臭いがしてきた。そもそもマジで限界なので火力魔法を使って一気に焼く。

ボワツ。

上手に焼けましたー。つて感じになつたので目に移して早速一口ほ  
ねます。

モグモグモグ。

何て言つんだわ。」このとおりにしちゃの絶妙な焼き加減。お

腹が減つてゐるときつてこつものへ歸へりこつまく感じじるよ。

まあといつあえず腹いしりはしたんだが、今の時刻は4時ジャスト。  
まだ時間あるし・・・もづきよつと寝ようかな。なんか眠りやす  
たときつて更に眠くなるよな。

なんだかんだソファーに向かう俺。

「あつ・・・シリウス様・・・」

・・・・シリウス様コマイシ（シリウス）居たんだっけ。

「シリウス様へ、一緒に寝ましょうよ～

なんだらか、こんなに可愛こ子に上田遣にされたら〇〇でござつ  
かないぢやないか。

「変な事しないならいいですよ。」

まあ、あれだ。俺も男つて事なんですよ。それに好きな子にこんな  
事言われたら嬉しいじゃないか。

「わかつたよ。早く早く～

最近思つたけど、シャルルって本当に一八なのか・・・世の中謎だ。

俺はソファーに横になつた。シャルルが毛布の中を、ソソソソと動いて、俺の上に乗ってきた。

そして先程と同じように俺の胸辺りに顔をグリグリしてくる。ホントに可愛いな。

俺はそんなシャルルの頭を撫でる。そして7時まで約3時間の眠りについた。  
あと

## ～学園生活～（後書き）

・・・・・・・すいません。作者最近、仕事と学校が忙しくて書いている暇がありませんでした。

クラス対抗闘技大会編に次話から入ります。期待しないで待っていてくださいwww

それでは、しーゅーへへ／

## ～学園生活4～

「…………様…………朝…………すよ…………お…………り…………  
・よ」

ん？なんだうう？誰かが何かを言つている。

「ん…………」

「もう～シリウス様つたら、仕方ないですな。」

チユ。

やわらかい何かが俺の唇に付いている気がするんだが……目を開けてみる。シャルルと目が合つた。ってあれ？なんでシャルルの顔がこんなに近くにあるんだ。

俺は眠っていた脳をフル回転させる。

・・・・・・・・キスされてるな、俺。

やつとの事で状況判断完了。って、おい。

ガバッ。

俺は上半身を起き上がる。その拍子にシャルルと繋がっていた唇は離れる。

「なつ、何してるんですか、シャルル様。」

「7時を過ぎたのに起きないシリウス様が悪いんですよ。」

起きなかつたらキスされるとか・・・もつ一回寝ようかな。って、何てこと考えてるんだ俺。

「あれ? 今何時ですか?」

「8時です。」

シャルルは平然と呟く・・・・・って、8時!?

集合時間は7時30分。そして現在の時刻は8時。正確に言つと8時3分。

「・・・・・・・遅刻だ。」

「・・・・・・・そうですね。」

俺は速攻で制服に着替える。シャルルは大会参加者じゃないので余裕そうだ。

急がないともうクラス対抗闘技大会が始まってるかもしれない。

制服に着替え終わつた俺はシャルルを部屋に残してクラス対抗闘技大会会場に急いだ。時間を止めて行く方法もあるが、どうせもう遅刻だと思つたから使わなかつた。

そして走る事10分少々。会場に着いた。この時点で約45分の遅刻。なんかわいわいと歓声が聞こえるってことは大会はもう始まっちゃってるみたいだ。最悪なパターンだな。

正直かなり気まずい。何で遅れたの?ってミコアに言われたら何て言えばいいんだ?寝てた、なんて言つたらまず間違いなく殺されるだろうな。

そんな事を考えながら東京ドームみたいな会場の周りを歩いて選手控え室へと書かれた看板を見つけて入り口の扉を開けた。そして閉めた。

だつて開けた瞬間にミコアさんがもの凄い目つきで睨んできたんだもん・・・まあ、そうなったのも寝坊した自分のせいなので俺はもう一度扉を開けて中に入る。

「おはよー、シリウス君。良く眠れたかい?」ニコシ

なんだらう笑顔のはずなのに殺氣が出ている気がするんですけど···

「おー、おはよー!」せこます。遅れて本当に、本当にすいません。」

俺はミコアさんの想定外の口振りにもの凄い恐怖を抱き、地面に四肢をつけて頭を擦りけた。まあぶっちゃけ畳つと下座なんですね。

するとミコアさんは

「どうしたんだい。シリウス君。まだ幸いな事に試合は始まつてい  
ないからそんなに謝らなくても大丈夫だよ。まあもし試合に遅れて  
たら・・・ふふふ」

ダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラ

俺の全身から冷や汗がこみ上げてくる。何だろう。もしもあと少し  
遅れてたら俺はどうなつてたんだろう。かなりの恐怖が全身を駆け  
巡る。

丁度そのとき女の人部屋に入ってきて、

「SクラスとBクラスの参加者の方達は闘技場に来てください」

と言つてきた。そしてミコアさんは

「あつ、私達の出番のようだな。シリウス君行くぞ。」

そう言つて、俺とミリアさんは控え室を後にした。

まあなんていふか・・・・・あれですよあれ。物語が浮かばなかつたりします。

まあでも、ノリで頑張るつと思ひます。  
毎度ながら短い本文ですいません。本当に書く時間が無いんですよ  
。^。^。

それではまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0029j/>

---

最強って何？

2010年10月9日20時21分発行